

一八八五年十月三十日(金)

聖ラーマクリシユナ、シャームプクルの家にて

シャームプクルの家で聖ラーマクリシユナと信者たち

一八八五年十月三十日、金曜日。アツシン黒分七日目、カルテイク月十五日。聖ラーマクリシユナはシャームプクルに治療のため来ておられる。いま二階の部屋にいらつしやる。午前九時、校長一人を相手に話をしておられる。やがて校長は、タクールの病状報告のためサルカル先生の邸へ行き、先生と共に再びここに来る予定だ。タクールはひどい病気なのに、ただ信者たちのことばかり思つていらつしやる！

聖ラーマクリシユナ「(校長にニコニコしながら)今朝、プールナが来たよ。まったく、いい性質だねえ！ マインドラはプラクリテイ(女性)の態度だ。すばらしいね！『チャイタニヤの伝記』を読んで、あれが理解できたんだなあ——ゴビーの態度、女友達の態度がね。神はブルシャ(男、精神)で、自分はプラクリテイのようなものだということが——」(訳註、チャイタニヤ・チャリタームリタ——平凡社・東洋文庫より「チヨイトンノ伝1・2」として邦訳あり)

校長「はい」

ブルナは校長のところの生徒で、年齢は十五、六才である。タクールはブルナに会いたくてたまらないのだが、彼の家でよこさないのだ。タクールがどんなにこの少年に会いたがつておられたか——。或る晩、南神村トフキネンヨルから突然タクールが校長の家にお見えになった。校長はやむなくブルナを家から連れ出してきてタクールに会わせた。ブルナに、神に対する祈り方やその他、いろいろなことを教えたり話したりなさつてから、タクールは南神村トフキネンヨルにお帰りになった。

マニンドラも年齢は十五、六才である。信者たちは彼のことを「ココカ（赤ちゃん）」と呼んでいる。この子は、至聖かみの名や讃歌を聞くと、恍惚こゝろことして踊りだすのである。

医者と校長

午前十時か十時半くらい、医師のサルカル先生の家に校長は来ている。道路に面した二階の応接間のベランダで、医師と校長は椅子に腰かけて話をしている。医師の前に水の入ったガラスの鉢が置いてあつて、何やら赤い色の魚が泳いでいる。医師はときどきカルダモン（スパイスになる実から）の殻を鉢に入れてやる。また時おり、小麦の粉を練つた小さなかたまりを屋根の上に放り投げてスズメにやつている。校長は観察していた。

医師（校長に）ハツハツハツハ、ごらんなさい。こいつら（赤い魚）は、私の方ばかりジツと見ていて、カルダモンのカラを投げてやつても、そつちの方を決してふり向かないんですよ。だから私は言う

のです——ただ信仰バクテリヤだけではいけない。智識ジニヤナが必要だ」と(校長笑う)。それからあれ、あのスズメ、私が練り粉を投げてやると飛んで逃げる——恐ろしがつているんですよ。智識がないから信仰もない。食べ物だということがわからないんです」

二人は応接間に入った。四方に書棚があつて本がぎっしり詰まつている。医師がちよつと休んでいるので、校長は本を見まわして一冊とりだした。そして、しばらく目を走らせた。キャノン・フアラ著『イエスの生涯』である。
CANNON FARRAR
Life of Jesus.

医師は時々、世間話をする。ホメオパシーの病院を始めるにあたつて、どんなに苦労が多かつたか、それに関係した手紙を読んでみて下さいと言う。——「その手紙はみな、西暦一八七六年の、カルカタ・ジャーナル・オブ・メディスンメヂシヤン」に載つていたものです」

医師はホメオパシーに大へんな情熱をもっているようだ。

校長はもう一冊本をとりだした。マンガールの『ニュー・セオロジ』である。医師はそれに目をとめた。医師「マンガーは見事な論法と推理で結論を引き出していますよ。これはね、あなた方はチャイタニヤがこう言った、ブツダがこう言った、イエス・キリストがこう言ったといつて簡単に信じるが、そういうのじゃないんですよ」

校長「はつはつはつは、チャイタニヤもブツダもだめ、しかしマンガーを信じる、というわけですか」
医師「何とでもおっしゃい」

校長「誰かを引き合いに出さなければなりませんからね、お互いに——。あなたの場合はマンガー

というわけです」(医師笑う)

医師は馬車に乗り、校長もいっしょに乗りこんだ。馬車はシャームブクルに向けて進んだ。正午近くになっている。二人は話をしながら乗っていた。バドゥリ医師も時どきタクールに会いに来る。話は彼のことになった。

校長「笑いながら」——バドゥリはあなたのことを、『石コロから始めなけりやならん』と言いましたね、ハッハッハッハ」

医師「どういふことなんでしょう？」

校長「マハートマーとか^{ストリシュマ・シャリウ}精妙体というようなものを、あなたが認めないからですよ。バドゥリ先生はたぶん、^{デオソフイスト}神智学徒でしょうね。それにあなたは神の化身の活動も信じておられない。だから、あの方はフザけて、そんなことを言われたのです。いまあなたが死んだとしたら、人間になんか決して生まれ更^かわってこない。ほかの生き物、動物や草木にさえも生まれ更^かわることはできない！ 石コロから始め直して、低級な生物からやや高級なものへ何度も何度も生まれ更^かわったあげく、気の遠くなるような未来に、やつとのもので人間の形に生まれるだろう、ということですよ」

医師「オー、ババ！ (何てこった！)」

校長「それから又、こうです。あなた方のサイエンスの知識は間違った知識だ——移り変わる頼りにならないのだと。彼は例をあげて話しましたよ——『二つの井戸がある。その一つは地下のスプリング(泉)から水が湧いている。二つ目のはスプリングがない。だが雨水がいっぱい溜まっている。』

しかし、この二つ目の井戸水は長い日数保たないだろう。あなたのサイエンスの知識もこれと同じ、雨水の溜まった井戸のように、間もなく干上がってしまうだろう」

「医師〔微笑して〕——へえ、そうですね」

馬車はコルナワリシ街に着いた。ここでサルカル医師はプラタブ医師を乗せた。彼は昨日もタクシーにお目にかかりに来た。

サルカル医師に対する教訓——智者の瞑想

ジニヤニー

タクールは例の二階の部屋におられる——数人の信者たちと共に。サルカル医師はプラタブ医師と何ごとか話している。やがて——

サルカル医師「(タクールに) また、カシ(ベンガル語で咳)がますますか? (ニッコリ笑って) カーシー(ベナレス)に行くのは大そう善いことです」(一同笑う)

聖ラーマクリシュナ「解脱しちまうよ! ハハハハ。わたしは解脱ムクティはいらない。信仰バクティがいるんだ」(医師と信者たち笑う)(訳註——カーシーで死んだ者は必ず解脱ムクティを得られると信じられているので、多くのヒンドゥー教徒がこの地で最期を迎えようと願っている)

プラタブ医師はバドゥリ医師の娘ムコダ。タクールはプラタブを見て、義父であるバドゥリ医師のことをおほめになった。

聖ラーマクリシュナ「(プラタブに) アハー、立派なお人柄だねえ! 神を想い、徳を積み、その上、

形のない神も形のある神も、みなよく理解して崇めていなさる」

校長は、あの石コロから始め直す話がある程度出ないものかと、内心すこぶる期待していた。彼は低く抑えた声で若いナレンに——タクールのお耳に入るだろうと思って——話しかけた。「石コロから始める話を、バドゥリ医師がなすつたのをおぼえているかい？」

聖ラーマクリシュナ（サルカル医師に）——ハッハッハッハ。あなたにどういふことを言ったか、知ってるかい？ あなたがここで皆が話していることを何にも信じないから、マヌ期（マヌヴァンタラ）の後、あなたは石コロから進化を始めなけりやならないだろうって……」（一同笑う）

医師「はっはっはっは。石コロから始まって、気の遠くなるほど沢山生まれかわって、やっと人間なつたと思つたらまた此処へきて、またまた石コロからやり直す……」（医師はじめ一同大笑い）

タクールがひどい病気にかかつているにもかかわらず、絶えず霊的な気分ひたり、神に關する話ばかりなさる、このことが話題になつた。

プラタプ「昨日も、半三昧ハイヴになつていらつしやいましたね」

聖ラーマクリシュナ「知らず知らずのうちに、ああなつてしまつたんだよ。でも、そう強いものじゃ

（訳註1）マヌヴァンタラ——プラフマー神の一日を十四人の人祖（マヌ）が各々等分して統治しており、一人のマヌが統治する期間を「マヌ期（マヌヴァンタラ）」という。各人祖の統治する期間が、即ち今の宇宙生物進化期に当たり、人間の時間に換算すると3億844万8千年に相当する。

ない」

医師「話すことも、精神的に興奮することも、今は体によくありませんがねえ」

聖ラーマクリシュナ「(医師に)——昨日、半三昧になって、あそこであんたを見たよ。あんたは知識の鉱山^{やま}で——でもすっかり乾いている。喜びの甘水がない。

(プラタプに)——この人(サルカル医師)がもし神の甘露を味わったら、下から上から一切合切見えるようになりなされる。そしてもう、自分の言うことだけ正しくて、他の人のいうことは正しくないなんてことは、二度と言わなくおなりだ。——それに、人の神経にさわるような言葉をズケズケ言わないようになるよ！」

〔人生の目的——以前の話——ナングタの教え〕

信者たちはみな、押し黙っていた。すると急に、タクール、聖ラーマクリシュナは霊的興奮状態になられて、サルカル医師にこうおっしゃった。

「マヘンドラさん、何で、カネ、カネと騒ぎまわるんだ！ 家内、家内！ 名誉、名誉！ そんなものばかりに気をとられているんだい！ みんな投げ捨てて、魂まるごと神さまに捧げてしまえ！ あの

楽しい経験をしてみる！」(訳註、マヘンドラ——サルカル医師の名前はマヘンドララル・サルカル)

サルカル医師は黙っていた。一同も沈黙。

聖ラーマクリシュナ「智者^{ジニヤー}の瞑想について、ナングタがよく話していたつけ。水、水、水、上も下も

果てしない水！ 人は魚のように楽しそうに泳いでいる。瞑想を正しくすれば、この様子がアリアリと見える。

無限の大海、果てしない水。そのなかに水がめが浮いている。かめの外も中も水なんだよ。智者はさとの——中も外も、すべてこれ、至上我と。では、この水がめは何だろう？ かめがあるから、水は二つ——内と外——に分かれて見える。かめがあるから私を感じ。その私が無くなると、それがあるだけ——。様子を語ることはできない。

智者の瞑想は、ほかにも似ているものがある。無限の大空に鳥が楽しげに飛び回っている——羽根を思いっきり広げて。純粹意識の大空にアートマンの鳥。この鳥はカゴに入っていない。心の大空（風見註）に天翔けて、その欲喜よろこびは果てしない。

信者たちは感動のあまり言葉もなく、この瞑想クワイヤナのヨーガの話カゴを聞いている。少ししてプラタプが口をきった。

プラタプ「（医師に向かって）——よくよく考えてゆけば、すべては影だということがわかります」
医師「影と言うなら、三つの条件が必要だ——太陽と、実体と、影と。実体がなくて影とはいったい

（原典註） P.B. Shelly's "To a Skylark" (P. B. Shellyの『ひばりに寄せて』)

パーシー・ビッシュ・シェリー (1792 ~ 1822) は社会の慣習と不正に反抗し、愛と自由を求めたイギリスのロマン派の詩人。「ひばりに寄せて」は、美しくさえずり高く高く舞い上がるひばりに寄せて、自由と純真への願いを歌った詩。

何ごとです！ それにまた、God real (神のみ真実)、そして、Creation unreal (創造物は真実ではない)とは！ Creation (創造物)も real (真実)ですよ！」

プラタプ「アツチャ、鏡にものが映るように、心という鏡にこの世界が映って見えるのです」

医師「^{ヴァストゥ}実体が一つもなかったら、いったい何が映るんですか？」

ナレンドラ「決まっているでしょう。神がその実体ですよ！」

医師は黙っていた。

〔世界の意識とサイエンス——神だけが行為者〕

聖ラーマクリシュナ「(医師に) あんたは一つ、いいことを言ったよ。^バ靈的恍惚は、心が神と合一^{ヨーガ}の状態になるときだ、なんて——。ほかの人は今まで誰も言わなかった。あんたが初めて言ったんだ。

シヴァナートがいつか、『あまり神のことを考えすぎると、頭がおかしくなってしまう』と言った。世界の意識そのものに心を集中して無意識になるとはね！ ♪それは知性そのもの。その知性によって世界は知覚しているというのに、♪それを考えすぎて知性がなくなるとは……。

それからあんたのサイエンス——コレを混ぜればアレになる、アレを混ぜたらコレになる——こんなことばかり考えていたら、それこそ知性がダメになってしまいうさ——生命のないものばかり相手にして！」

医師「それによっても、ちゃんと神を見ることができません」

校長「それにしても、やはり人間の中にこそ、最も明らかに神を見ることができなのです。また
マハーフルシヤ 霊的偉人においては、更に、更には、明らかです。マハーフルシヤ 霊的偉人の中に、神は最高に顕れあはわれているのです」

医師「フム、それはたしかですね」

聖ラーマクリシュナ「あの御方を想いすぎて無意識になるなんて、全く話にもならないよ！ その意識で、無生物まで命あるものに見えるんだし、手足や体が動いているんだ！ 体が動くというが、あの御方が動かしていることがわからないんだよ。湯で手をヤケドしたと言うが、湯がヤケドなんかさせるものか。湯のなかにある熱、湯のなかにある火性がヤケドさせたんだ！

鍋でご飯を炊いている。イモとナスも入れてある。火が通ってきて中のものが跳ねだすと、小さい子はイモとナスが自分で踊っている、と言う。下で火が燃えているのが原因だとわからないんだ！人間どもは、感覚器官が自力で作用しているように言う！ 中に、あの意識そのものがあつて動かしていることに、気がつかないんだよ！」

医者は帰るため立ち上がった。タクール、聖ラーマクリシュナもお立ちになった。

医師「困ったときの神頼み。人はそんなときになると、シアナタ、アナタ（神よ、神よ）シと言うものです。喉がそんなになってしまったのですから、自分でも言われたように——ほら、今は糸梳すき職人の手に渡ってしまったんですから、糸梳すき職人にそうおっしゃい。あなたが自分で言ったことですよ」（訳註——糸梳すき職人の話は、一八八五年十月二十二日「コタムリト」参照のこと）

聖ラーマクリシュナ「今さら、何を言えはいい？」

医師「どうして言わないんですか？ あの御方の膝ひざに抱かれて、膝ひざの上で排泄までしてらんです。病気になったら、あの御方に言わなくて、他の誰に言えはいいんですか？」

聖ラーマクリシユナ「ほんと、ほんと。時たま言おうとするんだけど、どうもうまくできないんだよ」

医師「でも、言わなきゃいけないことでしょうか。あの御方は知らないんですかねえ？」

聖ラーマクリシユナ「ハツハツハツハ。あるイスラム教徒がお祈りのとき、『おお、アッラーよ、おお、アッラーよ』と声をかぎりに叫んでいた。そばで聞いていた人がこう言ったとき、『お前さん、何でそんなに大声だしてアッラーを呼ぶのかね？ あの御方は、蟻の足輪の音だってお聞きとりになることを知らんのかね！』」

〔行者ヨギの特徴——行者は内に向いている——聖者ヨギヴィルヴァマンガル〕

聖ラーマクリシユナ「あの御方に心が合ヨイすると、神が大そう間近に見える。自分の胸の中に見える。だが、ここで一つ言っておくがね、このヨーガが進めば進むほど、外界ものの事物から心が引きあげてくる。バクタ・マーラー(訳註)に一人の信仰者(ヴィルヴァマンガル)(訳註)の話がでてゐる。彼は情婦のところによく通つた。或るとき、大そう夜が更けてからそこに行つた。その日は家で父母の法事をしたので、そんなに遅くなつたんだよ。法事の供えものを彼女に食べさせようと思つて手に持っていた。彼女のことで心がいっぱいなので、どこをどう通つてゐるのか上の空だった。道ばたで一人の行者ヨギが目をつぶつて神を瞑想していた。その行者ヨギの体にひよいと足をかけてしまった。行者ヨギは立腹して声を荒

げた。『きさま、どこ見てる！ 私が神を想っていたのに、体を踏んづけて行くとは何事だ！』すると、その人はこう言った。——『どうぞ、かんべんしてください。でも、一つ質問があります。私は情婦のことを想ってボンヤリしていたのですが、あなた様は神のことを想って、しかも外の出来事もハッキリ感じていらっしやる！ これは、どういう種類の瞑想ですか!?』——この人は終つひに、世間を捨てて専一に神に仕えることになった。彼は情婦にこう言った。——『あんたは私の師ウだよ。あんたは私に、どんなふうにして神を恋慕したらいいかを教えてくれた』そして情婦を、お母さんと呼んで、縁を切ってしまった」

医師「それは密教タクトの方式ですね。女を母と呼ぶ……」

（訳註2）バクタ・マラー——伝記作家ナーバージー（1573～1643）の作った説話で、多くの信バク者タの話が載っている。バクタ・マラーは『信バク者タの花輪』の意味。

（訳註3）ギリシユは、とても落ち込んでいたとき、タクールに会いに行きました。タクールはギリシユを励ますために、バクタ・マラーから聖者ヴィルヴァマンガルの話をしました。この話を通して、聖人となるような修行者として、そうではない偽の修行者について教えてくれました。そしてギリシユに、愛と放棄をテーマにしたこの話を劇にするよう頼んだのです。師との約束通り、ギリシユは芝居の台本を書き上げました。芝居の中に人を困らせる気遣いきづかいな女が登場しますが、これはタクールや信者たちを困惑させた実在の女性（一八八六年のコタムリトに登場）をモデルにしています。ギリシユは彼女の内に神への信仰と熱愛を見たのでした。そして一八八六年六月十二日、聖ラーマクリシュナ存命中に「聖者ヴィルヴァマンガル（ヴィルヴァマンガルタクール）」はスター劇場で初演の日を迎えたのでした。

〔家住者には人を導く資格はない〕

聖ラーマクリシュナ「ま、話をお聞き——

或る王様がいた。一人の学者について、毎日、毎日、*、*パーガヴァタ（プラーナ）*、*を聞いていた。毎日、講義が終わると学者は王様に聞くのだった——「王様、おわかりになりましたか？」すると王様も毎日決まった返事をする。——「あなたが先にわからなくちゃ！」学者は毎日、家に帰ると考える——王様はどうして毎日、同じことを言うんだらう。私が毎日こんなにハッキリ説明してあげているのに、いつも、*、*あんたが先にわからなくちゃ！*、*とやう。いったい、どういふつもりなんだらう？この学者はちゃんと修行もしていた。しばらくたつて修行中に、ハッキリ悟った——神のみ実在で、*、*ほかはみな、家も、家族も、財産も、友人も、名誉も、すべては非実在である、と。すると世間のことがみな空しく感じられて、彼は世を捨てる決心をした。家を出ていくとき、或る人に頼んで王様に言ってもらった——「今、私はわかりました」

それからもう一つお聞き。或る人が、パーガヴァタを講義してくれる学者が必要になった。学者に毎日来てもらつて、聖なる「パーガヴァタ（プラーナ）」を聞こう、という気持ちになつたのさ。ところが、なかなか学者が見つからない。さんざ探しているところへある人が来て、『とても優秀なパーガヴァタ学者が見つかったよ』と報告した。『そりゃよかつた。その方をお連れしてきてください』と返事したら、ある人はこう言う。『でも、ちよつと難点があるんだよ。その人は鋤をいくつかと、去勢牛を何頭か持つていて、一日中、野良仕事をしなくちゃいけないから、なかなかヒマがないらし

「い」とすると、その人はこう言った。『おや、おや、鋤や去勢牛を持って忙しがっているバーガヴァタ学者など、お断りします。私が探しているのは、ヒマがあつて、私に神の話を聞かせてくださる人だ』

(医者)に——「わかつたかい?」

医者は黙っていた。

〔ただの学識と医者〕

聖ラーマクリシュナ「わかるかい? ただの学識だけじゃどうにもならないってことが——。

学者たちは、沢山、沢山、いろんなことを知っているし、聞いている——ヴェーダ、プラーナ、タントラ、何でも知っている。しかし、ただ学問として知っているだけじゃ、悟りのタシにはならないよ! ヴィヴェカ ヴァイラギヤ 識別と離欲が不可欠なんだ。ひつよう 識別と離欲の精神を具えた人の話なら聞くに耐えるがね。世間のことが一番大事だと思つている連中の話なんか、何の役に立つかい!

ギーターを読んで何がわかる? ギーターギーターと十回くりかえしてみたらわかるよ。ギーターギーターと言つているうちに、ターギーターギーターになる。世間の女と金に対する執着を、すっかりターギーター(捨て)て、神に十六アナ(100%)の信仰を捧げた人こそ、ギーターの核心を理解した人だ。ギーターを全部読む必要はない。ターギーターギーターがほんとにわかれば、それでいいんだ」

医師「テヤーギー(捨離)と言ふのなら、ギーターに接続詞の「ヤ」を入れなければ「テヤーギー」にはなりませんよ!」

校長「そのことでしたら、ナヴァドヴィーブ・ゴースワミーが、ヤは必要ないとタクルに言われましたよ。タクルがパニハティの大祭に行かれたときには、バガヴァッド・ギーターの話を読んだんです。そのときゴースワミーは、タグという語源があって、それがタガになり、そこへ、イーをつけるとターギーになる。ターギーも、チャーギーも同じだ、と言っていましたよ」(訳註——この時の話は、一八八三年六月十八日「コタムリト」を参照のこと)

医師「或る人が私にラーダーの意味を教えてくださいましたよ。『ラーダーってどういう意味だか知っていますか？ 反対に言ってみるとわかります。つまり、ダーラー(流れ)、ダーラー』(一同大笑)ま、今日のところは、ダーラー(お流れ)ということにしておきましょう」

この世の知恵、またはサイエンス

医者は帰った。タクル、聖ラーマクリシュナの近くに校長が坐っていて、二人だけで話している。校長が今日、医者の家に行ったときの話をしているのである。

校長「聖ラーマクリシュナに）赤い魚にカルダモン(スパイスになる実の殻をやったり、スズメに練り粉の粒をやったりするのですよ。そしてこう言うのです。『ごらんなさい。魚はカルダモンの殻に見向きもしないで向こうへ行ってしまう！ だから智識が先ず第一で、信仰はそれからいいのです。スズメも練り粉の粒を投げてやると、パツと飛び立つ。つまり、智識がないから信仰もない』と」
聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッ。その智識というのはこの世の知恵のことだ。連中の言ってい

るサイエンスの知識のことだよ」

校長「それから、こう言いました。「チャイタニヤがこう言った、ブツダがこう言った、イエス・キリストがこう言った、だから信じる——というものではない」と。

お孫さんが一人生まれましてね、先生はお嫁さんを大そうほめておられました。「一日中、家の中に嫁がいることに気付かないほどだ。それほど、うちの嫁は静かで恥ずかしがり屋で……」と言って」
聖ラーマクリシュナ「こちら（自分を指す）のことを考えているよ。だんだん信じるようになるだろう。我執高慢アハンカラというものは、いっぺんにはなくならないさ！ あんなに知識があつて、あんなに有名なんだもの！ おカネも持つてるし！ それなのに、こちらの言うことをけなしたりしない」

アディヤシャクティ
根元造化力の顕現——常樂サダーナンド

午後五時、タクールは二階の部屋に坐つていらつしやる。信者たちがとりまいてる。皆、黙つてゐる。そのうちに外部の人たちがあの方を見て来て来た。それでも皆、黙つたままである。

校長はタクールのすぐ傍に坐つてゐる。タクールと低い声で、一言、二言、思い出したように言葉をお交わしていた。タクールは上衣ジャマを着ておられた。校長がお着せしたのである。

聖ラーマクリシュナ「（校長に向かつて）ねえ、近ごろは、あんまり瞑想する必要がなくなつたよ。すぐに不可分アカンダの意識になつてしまふんだ。今は見えるだけだよ」

校長は黙つてゐる。部屋は静まり返つてゐる。

しばらくするとまた、タクールは校長にひとことおっしゃった。

聖ラーマクリシユナ「アッチャ、ここにいる人たちは、みんな黙って坐って、わたしの方ばかり見ている。しゃべりもせず、歌いもしないのに——。何を見ているんだね？」

タクールはそれとなくおっしゃったのだろうか——神そのものが人間の体をとって現れている場合、これほど人を惹きつけるのだ。信者たちは口もきけずに、吸い寄せられるように、こちらを見続けている！

校長はやおら答えた。「はい。みんなは今まで、あなた様のお言葉をたくさん聞きました。それで今は、ただ見ているのです——ほかでは見られないものを——常樂サダーナンドの、幼児のような、我執アハンカラのない、神の愛に酔っているお姿を！ いかイシヤン・ムクジエーの家にいまして、表側の部屋を歩いておられたとき——私たちもおりましたが、ある人があなた様のことをこう申しました——『こんな常樂サダーナンドの魂を、今まで何処どこでも見たことがない』と」(訳註、サダーナンド——常サダーにと至福アムシの合成語)

校長は再び口をつぐんだ。部屋はまた静まり返った。しばらくして、タクールがまた校長に甘い声で何かおっしゃった。

聖ラーマクリシユナ「アッチャ、あの医者はどうな具合かね？ こちらの話をみんな、よく受けとつてるようかね？」

校長「力ある種子たねは何処どこへ蒔まかれても、遅かれ早かれ必ず芽を出しましょう。先日のお話、思い出すとおかしくて、おかしくて——」

聖ラーマクリシュナ「何の話だっけ？」

校長「ジャドウ・マリックが食事のとき、どの料理に塩が入っているか、どの料理に塩が抜いてあるか、ぼんやりしてさっぱりわからなかったというお話です。それほど放心状態だったというわけです！ 誰かが、『この料理は塩が抜いてあるんですよ』と注意してあげると、すっとなん狂な声を出して、『エッ？ エ？ 塩が入っていない？』

医師にこの話をお聞かせになったのですよ。あの方が、『私はすぐ、ボンヤリしましてねえ』などと言ったものだから——。あなた様は医師に、ジャドウは俗事をあれこれ考えすぎてボンヤリしていたのであって、神想のためではない、ということをわからせようとなすったのです」

聖ラーマクリシュナ「そのことについて、考えるだろうか？」

校長「おわかりになるでしょうとも。でも、あまり用事がありすぎるので、忘れてしまう場合もかなりあるようございます。今日もいいことを言われましたね。『それはタントラ式の修行法です——女を母と見なすのは……』と」

聖ラーマクリシュナ「わたしや、何を話したんだったかな？」

校長「去勢牛を何頭も持っているバーガヴァタ学者の話（タクール笑う）。それから、講義をしてくれる学者に毎日、『あなたが先にわからなくちゃ！』と言う王様の話（タクール笑う）。

それからギターのこと。ギターの核心は——女と金を捨てろ——女と金に執着する心を捨てろ、ということ。医師にあなた様はこうおっしゃいました。『世俗の人が、（欲を捨てないで）人を導いたり

できるか?』これは、あの方にはよく理解できなかったようですね。終いに、^{しま}ダーラー、^{しま}ダーラー、などと行ってごまかしていました」

タクールは信者たちのことをいつも考えていらつしやる。——少年信者のプールのこと、同じくマニンドラのこと。タクールはマニンドラに、プールのところへ行って話をするようにとおつしやつた。

聖ラーダー、聖クリシュナの定義について——すべてが可能——永遠と変化
ニティヤ
リーラー

夕暮れになった。タクール、聖ラーマクリシュナのお部屋に明かりが灯ともされた。数人の信者とタクールに会いにきた人たちは、タクールからやや離れて坐っている。タクールは心を奥に向けて、お話をなさらない。ほかの人々もみな神の想いにふけり、部屋の中は静まり返っている。

間もなくナレンドラが友人を一人連れてやってきた。ナレンドラは友人を紹介した。——「この人は僕の友人で、数冊の著書があります。『キランマイー(太陽の光のように輝く女性)』を書いた人です」『キランマイー』の作者(ラージクリシュナ・ラーイ)はタクールにあいさつをして座についた。タクールは彼と話をなさる——。

ナレンドラ「この人は、ラーダー・クリシュナのことも書いておられるのですよ」

聖ラーマクリシュナ「(作家に向かつて) どんなこと書いてるの? 聞かせておくれよ」

作家「ラーダー・クリシュナこそ至高パのブラフマンであり、オームの精髓でありました。あのラーダー・クリシュナである至高パのブラフマンから大マヴィシュヌが、大マヴィシュヌからブルシャとブラク

リテイ——つまり、シヴァとドウルガーが生まれたのです」

聖ラーマクリシュナ「すてきだ！ クリシュナの養父、ナンタ・ゴシユは、絶対・永遠なるラーダーを見た。聖愛なるラーダーは、プリンダーヴァンでクリシュナと遊びなすつた。チャンドラヴァリーは愛欲のラーダーだった。

愛欲のラーダーと聖愛なるラーダー。——それがもつと進むと絶対・永遠なるラーダーになる。タマネギの皮をむくとき、先ず固い赤い皮、次がうすいピンクの皮、そのあとが白くなってもう皮がむけなくなる。あれが絶対・永遠なるラーダーの姿で、そこまでいくともう、ネーテイ、ネーテイ（これではない、これではない）の分別は止まってしまおう！（訳註——インドのタマネギは日本のものと少し異なる）

永遠・絶対のラーダー・クリシュナ、それから相對活動のラーダー・クリシュナ。この二つは太陽と光線のようなものだ。永遠・絶対が太陽自身、相對活動が太陽の光線。

純粹な神の信者は、時にはニテイヤに住み、時にはリーラーに住む。

絶対である御方が活動するんだ。あるのは一つだけ、二つでも多でもない」

作家「ところで、プリンダーヴァンのクリシュナとか、マトウラーのクリシュナとか言つて

（訳註4）プリンダーヴァンのクリシュナとは、プリンダーヴァンでラーダーや牛飼、乙女たちと遊び戯れているクリシュナの姿で、マトウラーのクリシュナとは、マトウラーやドウワラカでの王様としてクリシュナの姿で、ここではラーダーは登場しない。

いるのは、どういふものなのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「それは、ゴースワミー（ヴィシュヌ派の説教師）たちの意見なんだよ。西の方の学者たちはそういうことは言わないだよ。彼らにとつてはクリシュナ一人だけ、ラーダーは認めない。ドウワラカのクリシュナだけを認めている」

作家「とにかく私は、ラーダー・クリシュナこそ至上梵パラブラフマンだと思つています」

聖ラーマクリシュナ「それでいいんだよ！ けれど、あの御方は何でもお出来になるだろう？ あ
の御方こそ無形の神であり、有形の神なんだ。あの御方こそ、個スヴァラトであり、普遍ヴァラトだ。あの御方こそ
ブラフマン、あの御方こそシャクテイだ！

あの御方には終わりが無い。あの御方にとつてはあらゆることが可能なんだよ。トンビやタカがど
んなに高く飛んでも大空に突き当たることはできない。ブラフマンとはどんなものか教えろと言われ
ても説明できるものか。ソレじかにと直接会つた人でも、口で言える筈がないよ。ギーはどんな味かと
聞かれたら、ギーはギーの味だとしか言いようがないだろう。ブラフマンはブラフマンのようだとし
か、ほかに何とも説明のしようがない」（訳註、ギー——一度発酵した乳から作ったバターで独特の風味がある）